

青年期における「甘え」と主観的健康感との関連

田代 裕子

(伊原ゼミ)

問 題

甘え

甘えという、主に幼い子供が養育者など親しい人に対して表す態度だと考えやすいが、これは現代の大人にもあてはまることである。日本文化特有の対人関係を理解するにあたり甘えの概念を提唱した土居（1971）は、「甘え」は本来、親子関係、夫婦関係、師弟関係、親しい友人関係などの特別に親しい二者関係を前提とし、そのような二者関係の中で一方が他方に甘えるということであると述べている。

甘えは、本来乳幼児の母親に対する感情として起きると考えられるので、精神分析理論のエディプス複合成立以前にすでに始まっているとみられ、また、発達的に見れば甘えの心理的原型は母子関係における乳児の心理に存するという事は明らかである（土居 1971）。

土居（1971）は、「甘え」とは、乳児の精神がある程度発達して、母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に、その母親を求めることを指している言葉であるということを描きしており、生まれただの乳児については甘えているとはいわないと述べている。また、本来甘えの育つべき場所である家庭が不安定でこわれやすくなったために、母親や親しい家族がいて安心な「家庭」という逃げ場を失った子供たちが、いじめが原因で自殺してしまっているという深刻な事態が起こっているということも描きしている。このような状態を考慮すると、「甘える」ということがいかに重要なかがよくわかる。一方、土居（1971）の『「甘え」の構造』では、甘えを社会的な側面からも捉えており、大人のような子供がふえ、それと同じように大人には、子供のような大人がふえ、子供と大人の区別が判然としなくなったと描きしている。そして、このように、皆一様に子供のごとく

甘えることは、人類的な退行現象と捉えるべきか、将来の新しい文化を創造するために必要な段階と捉えるべきかは誰にもわからないという疑問が残されたまま、文章は締めくくられている。

すなわち甘えは、時代によって捉えられ方が異なり、甘えが社会に良い影響を与えるのか、悪い影響を与えるのかは、その時代になってみないとわからないということになる。

現在までに、「甘え」に関する研究は数多くなされている。北村（1987）は、甘えを示す子が好ましい形での確に養育者に受け入れられたうえで養育されなかった際、子どもの自我構造は弱く、柔軟性に欠けている場合が多いと指摘している。また、谷（2000）は、土居（1971）が唱えた「甘え」概念を、ただ「甘える」という一語だけが単独に存在しているのではなく、それ以外に「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」「ふてくされる」「やけくそになる」「たのむ」「こだわる」「わだかまる」「すまない」などの言葉で甘えの心理を表現できるということを検討し、内田（1998）による「甘え」概念の多義性を肯定的に捉えた研究をもとに、「甘え」尺度を作成した。谷（2000）は、「甘え」の構造について、「甘え」概念は「直接的甘え」「屈折的甘え」「とらわれ」の3因子構造から成ることを明らかにし、土居（1997）の指摘する、「甘え」には「素直な甘え」と「屈折した甘え」の二種類があるという理論の、「素直な甘え」を「直接的甘え」と、「屈折した甘え」を「屈折的甘え」と関連付けた。また、「とらわれ」とは、森田療法を創設した森田正馬が神経質と関連のある精神作用に対して名付けたものである（土居 1971）。神経質とは、頭痛・動悸・疲労・胃部膨満感などの種々の身体的症状に悩まされるものの、検査の結果で特に身体的異常が認められないことや、身体的症状の他に何らかの恐怖・不安・羞恥を強く訴えることの総合名称である（土居 1971）。また、土居（1971）は自己に対する意

青年期における「甘え」と主観的健康感との関連

識にも注目しており、その有無を「自分がある」「自分がない」と表現している。谷(2000)は、この「自分がない」ということを含めた6項目を「とらわれ」と名付けた。そして、前述したように、「直接的甘え」「屈折的甘え」「とらわれ」の3因子を組み合わせたものを「甘え」尺度とした。

また、屈折的甘え、配慮の要求、許容への過度の期待を特徴とした甘えを自己愛的甘えという(稲垣 2007a)。自己愛的甘えとは、甘えの対象との信頼関係・相互関係に問題があった場合、甘えが屈折し、甘えたいのに甘えられず、一方的で要求がましい形をとるようになった甘えである(稲垣 2013)。青年期における自己愛傾向とは、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求によって特徴づけられる(小塩 1998)。原因として、他者から愛されない、好意を持たれないという経験により自己愛傾向になるのではないかと考えられている(大野 2008)。自己愛的な人は、たとえ周囲にひどく依存している状況であっても、それを認めないために甘えの欲求はいつまでも満たされない。その結果、甘えは自己愛的な要求の形をとる。この甘えは、相手があつて甘えている素直な甘えではなく、誰と関わるかという相互関係とは無関係にただ甘えることだけを求めたものである(神谷・上地・岡本 2012)。自己愛的甘えの傾向を持つ人は、甘えたいのに甘えさせてもらえなかったと感じやすく、見捨てられることへの不安を抱きやすくなっているのではないかと考えることができる。

谷(2006)によると、自己愛的甘えにおける「屈折的甘え」や「配慮の要求」は、「自己愛性抑うつ」や「自己愛的憤怒」といった自己愛の過敏性と主に関連を持ち、自己愛的甘えにおける「許容への過度の期待」は、「自己主張性・自己中心性」や「有能感・優越感」などの自己愛の誇大性と関連を持つことに加えて、「自己愛的憤怒」とも中程度の相関がみられることが指摘されている(稲垣 2013)。そして、稲垣(2007a)では、自己愛的甘え尺度は対人恐怖的心性尺度や疎外観念・被害観念尺度とも関連を示し、人間関係において他者との関係がうまくもてないことについて悩む意識を伴っていることが明らかになり、さらに、稲垣(2006、

2007b)では、自己愛的甘えは、基本的信頼感が形成されていないことや、自己愛的対人態度、一体感願望などと関連があることが明らかになっている(稲垣 2013)。

主観的健康感

心の健康とは、個人が基本的欲求を充足させながら、もろもろの環境条件にうまく適応していくことによって得られるものである(長谷川 1994)。心の健康は、健康感尺度によって測定することができる。

日本で主に使用される健康感尺度として、大野・吉村(2010)により構成された主観的健康感尺度40項目や、相馬・春木・野呂(1991)により構成された健康感尺度40項目等がある。

主観的健康感尺度(原著 WHO Dr.H.Sell, Dr.R.Nagpall WHO SUBI NO.840 The Subjective Well-being Inventory)とは、世界保健機関(WHO)が発表した、個人がそれぞれの経験の中で、身体的、精神的、社会的にどの程度健康であるかを測定しようとしたものである。

大野・吉村(2010)による主観的健康感尺度では、心の健康度、心の疲労度をみることができる。心の健康度の得点が高いと、周りの人たちと安定した関係が築かれ、必要な時に必要な助けが得られ、毎日の生活に満足し、自信を持って生きることができていると言え、心の疲労度の得点が低いと、精神的にも身体的にも疲れてきている可能性があると言える(大野・吉村 2010)。また、この2因子以外にも、「人生に対する前向きな気持ち」、「達成感」、「自信」、「至福感」、「近親者の支え」、「社会的な支え」、「家族との関係」、「精神的なコントロール感」、「身体的な不健康感」、「社会的つながりの不足」、「人生に対する失望感」の11個の下位尺度にわけ、さらに細かく分析することができる。

この質問紙は、個人の感情のみでなく、その個人の置かれている現実をどのように認知しているかという側面を含めた総合的な心理学的健康に焦点をあてたものである(藤南・園田・大野 1995)。

これら健康感尺度を用いた研究として、中学生の不登校や出産後のマタニティブルーズと関連付けられたものがある。

東條・保坂(1995)は、不登校の状態にある中学

生に対し、その総合的な状態像を把握しようとする試み、主観的な反応について検討することが重要と考え、相馬ら(1990)が開発した健康感尺度 FHI (Feeling of Health Inventory) を用いて、不登校者の自己認知に関し、主観的健康感の見地から非不登校者との比較検討を行った。その結果、全日不登校者は部分登校者に比べ、有意に低い FHI 得点を示しており、登校することは彼らにとって健康感を高める要因となることが明らかになった。

津田・田中・津田(2004)は、大野・吉村(2010)による主観的健康感尺度を用いて、妊娠後期妊婦の心理的健康感を多面的に測定し、出産後5日間のマタニティブルーの発症の関連性について検討した。その結果、出産後5日目のマタニティブルー症状は妊娠後期の心理的健康感と有意な負の相関を示し、津田・田中・津田(2004)は結論として、出産後のマタニティブルーの影響を軽減するための方策として、妊娠後期の心理的健康感、とりわけ心の疲労度を少なくすることが重要だと述べている。

そこで本研究では、主観的健康感が「甘え」に与える影響を明らかにすることを目的とし、調査を行う。

目 的

本研究では、主観的健康感尺度 (SUBI) を用いて、甘えと主観的健康感の関連を明らかにすることを目的とする。

土居(1971)は、日本人は本来甘えたいがために、しかし実際にはなかなか甘えられないので甘えを否定しているということを指摘している。また、人間はかつて甘えるということを経験しなければ、自分を持つことができないと述べている。このように、甘えは「自分」というものを獲得し、自分らしく生きていくために欠かせない要素だということがわかる。

前述したように、主観的健康感とはマタニティブルーや不登校といった社会的問題との関連が指摘されている(津田・田中・津田 2004)(東條・保坂 1995)。ゆえに、主観的健康感が高い程、これらの問題を解決しようとする能力が高いと考えられることができる。

そこで、本研究では、主観的健康感(「人生に対する前向きな気持ち」、「達成感」、「自信」、「至福感」、「近親者の支え」、「社会的な支え」、「家族との関係」、「精神的なコントロール感」、「身体的な不健康感」、「社会的つながりの不足」、「人生に対する失望感」の計11下位尺度)が、甘えに与える影響を調査する。

直接的甘えと主観的健康感の相関、屈折的甘えと主観的健康感の相関、とらわれと主観的健康感の相関をそれぞれ調べ、主観的健康感と甘えの下位尺度にどのような関連があるかを調べる。

仮 説

主観的健康感、特に「人生に対する前向きな気持ち」、「達成感」、「自信」、「至福感」、「近親者の支え」、「社会的な支え」、「家族との関係」、「精神的なコントロール感」において高い得点を得やすいと、物事を肯定的に捉えやすく、比較的感情をうまく表出することができるため、健康的な甘えができており、不満も少なく、「直接的甘え」が高くなると考えられる。特に、健康的な甘えを引き出すことのできる家庭環境について高く評価するのではないかという予想から、「近親者の支え」と「家族との関係」は他の要素よりも、より顕著に差が出るのではないかという仮説を立てる。

また、主観的健康感、特に環境への不満から「近親者の支え」、「家族との関係」、「社会的な支え」において低い得点を得やすいと、自分の欲求が満たされないと考えやすいため、自分が置かれている環境に満足できず、屈折的甘えおよび自己愛的甘えが高くなるという仮説を立てる。

また、「心の疲労感」や「精神的なコントロール感」において低い得点を得やすいと、「自分」という意識に乏しい傾向にあると考えることができ、「とらわれ」の得点が高くなると考えられる。

方 法

調査時期 2015年11月中旬に調査を実施した。

調査対象者 京都学園大学に在籍する大学生136名に対して調査を行い、回答に不備のあるものを除いた129名(男性79名、女性50名、平均年齢20.19歳)から得られた回答を分析の対象とした。

調査の手続き 京都学園大学の講義時間に質問紙を配布し、その場で回答を求め、講義時間内に回収した。

質問紙の構成

(1) フェイスシート

調査対象者の基本属性（性別、年齢、学部）の記入欄を設けた。

(2) 甘え尺度

土居（1971）の「甘え」概念の多義性を肯定的に捉えたものとして、内田（1998）の「甘え」尺度がある。谷（2000）は、これを再検討し、青年期における「甘え」の構造について、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」の3因子からなることを明らかにした。本研究では、前述した谷（2000）の「直接的甘え」と「とらわれ」の2因子を使用し、さらに「屈折的甘え」を含めた稲垣（2007）の「自己愛的甘え」尺度を取り入れた項目で質問紙を作成した。なお、稲垣（2007）の「自己愛的甘え」尺度の使用に関しては、神谷・上地・岡本（2012）がこの尺度を使用した際に、回答者の負担を考え、各下位尺度から5項目を選定した計15項目を使用した。質問紙調査の実施に関しては、前述したように、谷（2000）の「直接的甘え」10項目、稲垣（2007）の屈折的甘えを含めた自己愛的甘え15項目（本研究では「屈折的甘え」として扱う）、谷（2000）の「とらわれ」6項目を組み合わせた全31項目を用い、「1. 全く当てはまらない」～「5. 非常によく当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(3) 主観的健康感尺度（SUBI）日本語版

大野・吉村（2010）により構成された、主観的健康感尺度（原著 WHO Dr.H.Sell, Dr.R.Nagpall WHO SUBI NO.840 The Subjective Well-being Inventory）40項目を用い、3件法で回答を求めた。質問項目は「人生に対する前向きな気持ち」3題、「達成感」3題、「自信」3題、「至福感」3題、「近親者の支え」3題、「社会的な支え」3題、「家族との関係」3題、「精神的なコントロール感」7題、「身体的な不健康感」6題、「社会的つながりの不足」3題、「人生に対する失望感」3題の計40項目から構成されている。

主観的健康感尺度では、心の健康度、心の疲労度をみることができる。心の健康度の得点が

高いと、周りの人たちと安定した関係が築かれ、必要な時に必要な助けが得られ、毎日の生活に満足し、自信を持って生きることができていると言え、心の疲労度の得点が低いと、精神的にも身体的にも疲れてきている可能性があると言える（大野・吉村 2010）。また、この2因子以外にも、「人生に対する前向きな気持ち」、「達成感」、「自信」、「至福感」、「近親者の支え」、「社会的な支え」、「家族との関係」、「精神的なコントロール感」、「身体的な不健康感」、「社会的つながりの不足」、「人生に対する失望感」の11個の下位尺度にわけ、さらに細かく分析することができる。

結 果

主観的健康感における11下位尺度の平均値と標準偏差を表1に示した。「人生に対する前向きな気持ち」の平均値は5.85、また標準偏差は1.59であった。「達成感」の平均値は5.40、また標準偏差は1.41であった。「自信」の平均値は5.07、また標準偏差は1.49であった。「至福感」の平均値は4.90、また標準偏差は1.30であった。「近親者の支え」の平均値は6.36、また標準偏差は1.61であった。「社会的な支え」の平均値は5.74、また標準偏差は1.87であった。「家族との関係」の平均値は11.26、また標準偏差は2.49であった。「精神的なコントロール感」の平均値は14.21、また標準偏差は3.23であった。「身体的な不健康感」の平均値は13.76、また標準偏差は2.57であった。「社会的つながりの不足」の平均値は6.35、また標準偏差は1.47であった。「人生に対する失望感」の平均値は5.95、また標準偏差は1.55であった。

また、甘えにおける3下位尺度の平均値と標準偏差を表2に示した。「直接的甘え」の平均値は30.75、また標準偏差は7.59であった。「屈折的甘え」の平均値は41.26、また標準偏差は9.99であった。「とらわれ」の平均値は18.71、また標準偏差は4.50であった。

表1 主観的健康感の記述統計量

	平均値	標準偏差
人生に対する前向きな気持ち	5.85	1.59
達成感	5.40	1.41
自信	5.07	1.49
至福感	4.90	1.30
近親者の支え	6.36	1.61
社会的な支え	5.74	1.87
家族との関係	11.26	2.49
精神的なコントロール感	14.21	3.23
身体的な不健康感	13.76	2.57
社会的つながりの不足	6.35	1.47
人生に対する失望感	5.95	1.55

表2 甘えの記述統計量

	平均値	標準偏差
直接的甘え	30.75	7.59
屈折的甘え	41.26	9.99
とらわれ	18.71	4.50

(1) 相関係数

主観的健康感と甘えの関係を見るため相関分析を行い、結果を表3に示した。

「人生に対する前向きな気持ち」と「直接的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.008$, ns)。「人生に対する前向きな気持ち」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.056$, ns)。「人生に対する前向きな気持ち」と「とらわれ」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.099$, ns)。「達成感」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.260$, $p<.01$)。「達成感」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.086$, ns)。「達成感」と「とらわれ」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.161$, ns)。「自信」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.288$, $p<.01$)。「自信」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.058$, ns)。「自信」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.228$, $p<.01$)。「至福感」と「直接的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=.087$, ns)。「至福感」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.129$, ns)。「至福感」と「とらわれ」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.050$, ns)。「近親者の支え」と「直接的甘え」の間には、有意な正の相関が認められた ($r=.177$, $p<.05$)。「近親者の支え」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関

は認められなかった ($r=-.154$, ns)。「近親者の支え」と「とらわれ」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.033$, ns)。「社会的な支え」と「直接的甘え」の間には、有意な正の相関が認められた ($r=.180$, $p<.05$)。「社会的な支え」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.094$, ns)。「社会的な支え」と「とらわれ」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.075$, ns)。「家族との関係」と「直接的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.151$, ns)。「家族との関係」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.084$, ns)。「家族との関係」と「とらわれ」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.154$, ns)。「精神的なコントロール感」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.298$, $p<.01$)。「精神的なコントロール感」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.580$, $p<.01$)。「精神的なコントロール感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.578$, $p<.01$)。「身体的な不健康感」と「直接的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.166$, ns)。「身体的な不健康感」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.271$, $p<.01$)。「身体的な不健康感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.272$, $p<.01$)。「社会的つながりの不足」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.347$, $p<.01$)。「社会的つながりの不足」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.208$, $p<.05$)。「社会的つながりの不足」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.303$, $p<.01$)。「人生に対する失望感」と「直接的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.085$, ns)。「人生に対する失望感」と「屈折的甘え」の間には、有意な相関は認められなかった ($r=-.134$, ns)。「人生に対する失望感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.230$, $p<.01$)。

また、性別ごとにも主観的健康感と甘えの関係を見るため相関分析を行い、男性の相関分析の結果を表4、女性の相関分析の結果を表5に示した。

男性においては、以下のような結果が得られた。「達成感」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.229$, $p<.05$)。「自信」と「直

青年期における「甘え」と主観的健康感との関連

「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.239, p<.05$)。「精神的なコントロール感」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.339, p<.01$)。「社会的つながりの不足」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.403, p<.01$)。「精神的なコントロール感」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.646, p<.01$)。「身体的な不健康感」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.361, p<.01$)。「精神的なコントロール感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.577, p<.01$)。「身体的な不健康感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.261, p<.05$)。「社会的つながりの不足」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.327, p<.01$)。

女性においては、以下のような結果が得られた。「達成感」と「直接的甘え」の間には、有意な負の

相関が認められた ($r=-.380, p<.01$)。「自信」と「直接的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.389, p<.01$)。「至福感」と「直接的甘え」の間には、有意な正の相関が認められた ($r=.293, p<.05$)。「近親者の支え」と「直接的甘え」の間には、有意な正の相関が認められた ($r=.313, p<.05$)。「達成感」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.296, p<.05$)。「精神的なコントロール感」と「屈折的甘え」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.459, p<.01$)。「達成感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.340, p<.05$)。「自信」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.394, p<.01$)。「家族との関係」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.283, p<.05$)。「精神的なコントロール感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.592, p<.01$)。「身体的な不健康感」と「とらわれ」の間には、有意

表3 主観的健康感と甘えの相関分析

	人生に対する前向きな気持ち	達成感	自信	至福感	近親者の支え	社会的な支え	家族との関係	精神的なコントロール感	身体的な不健康感	社会的つながりの不足	人生に対する失望感	直接的甘え	屈折的甘え	とらわれ
人生に対する前向きな気持ち	—													
達成感	.388**	—												
自信	.421**	.564**	—											
至福感	.433**	.302**	.184*	—										
近親者の支え	.306**	-.016	-.088	.366**	—									
社会的な支え	.282**	-.098	.059	.419**	.551**	—								
家族との関係	.854**	.811**	.586**	.446**	.186*	.124	—							
精神的なコントロール感	.083	.079	.263**	.064	.084	.158	.097	—						
身体的な不健康感	.179*	-.083	.049	.037	.314**	.191*	.067	.388**	—					
社会的つながりの不足	-.131	.011	.070	-.237**	-.190*	-.082	-.077	.382**	.170	—				
人生に対する失望感	.540**	.211*	.354**	.375**	.324**	.311**	.462**	.277**	.354**	.068	—			
直接的甘え	-.008	-.260**	-.288**	.087	.177*	.180*	-.151	-.298**	-.166	-.347**	-.085	—		
屈折的甘え	-.056	-.086	-.058	-.129	-.154	-.094	-.084	-.580**	-.271**	-.208*	.134	.525**	—	
とらわれ	-.099	-.161	-.228**	-.050	-.033	-.075	-.154	-.578**	-.272**	-.303**	-.230**	.484**	.584**	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

表4 男性における主観的健康感と甘えの相関分析

	直接的甘え	屈折的甘え	とらわれ
人生に対する前向きな気持ち	-.127	-.026	-.075
達成感	-.229*	.005	-.076
自信	-.239*	.025	-.119
至福感	-.071	-.094	-.014
近親者の支え	.094	-.192	-.129
社会的な支え	.112	-.097	-.065
家族との関係	-.209	-.013	-.089
精神的なコントロール感	-.339**	-.646**	-.577**
身体的な不健康感	-.197	-.361**	-.261*
社会的つながりの不足	-.403**	-.215	-.327**
人生に対する失望感	-.110	-.169	-.184

* $p < .05$, ** $p < .01$

表5 女性における主観的健康感と甘えの相関分析

	直接的甘え	屈折的甘え	とらわれ
人生に対する前向きな気持ち	.138	-.130	-.145
達成感	-.380**	-.296*	-.340*
自信	-.389**	-.194	-.394**
至福感	.293*	-.196	-.106
近親者の支え	.313*	-.095	.102
社会的な支え	.262	-.111	-.097
家族との関係	-.106	-.249	-.283*
精神的なコントロール感	-.186	-.459**	-.592**
身体的な不健康感	-.067	-.110	-.290*
社会的つながりの不足	-.228	-.184	-.255
人生に対する失望感	-.069	-.097	-.302*

* $p < .05$, ** $p < .01$

な負の相関が認められた ($r=.290$, $p<.05$)。「人生に対する失望感」と「とらわれ」の間には、有意な負の相関が認められた ($r=-.302$, $p<.05$)。

(2) 重回帰分析

主観的健康感が「甘え」にどのような影響を与えているのかを明らかにするため、甘えを構成する3下位尺度「直接的甘え」「屈折的甘え」「とらわれ」を従属変数とし、主観的健康感を構成する11下位尺度「人生に対する前向きな気持ち」「達成感」「自信」「至福感」「近親者の支え」「社会的な支え」「家族との関係」「精神的なコントロール感」「身体的な不健康感」「社会的つながりの不足」「人生に対する失望感」を独立変数とした重回帰分析を行い、結果を表6に示した。

「直接的甘え」について、正の影響を及ぼしたのが、「近親者の支え」($\beta =.357$, $p<.01$)、「社会的な支え」($\beta =.347$, $p<.01$)であり、負の影響を及ぼしたのが、「達成感」($\beta =-.273$, $p<.05$)、「自信」($\beta =-.303$, $p<.01$)、「社会的つながりの不足」($\beta =-.279$, $p<.01$)であり、影響を及ぼさなかったのが、「人生に対する前向きな気持ち」($\beta =.058$, ns)、「至福感」($\beta =.218$, ns)、「家族との関係」($\beta =-.117$, ns)、「精神的なコントロール感」($\beta =.104$, ns)、「身体的な不健康感」($\beta =.010$, ns)、「人生に対する失望感」($\beta =.038$, ns)であった。

「屈折的甘え」について、正の影響を及ぼしたのが、「自信」($\beta =.225$, $p<.05$)であり、負の影響を及ぼしたのが、「近親者の支え」($\beta =-.336$, $p<.01$)、「精神的なコントロール感」($\beta =-.406$, $p<.01$)であり、影響を及ぼさなかったのが、「人生に対する前向きな気持ち」($\beta =-.019$, ns)、「達成感」($\beta =.112$, ns)、「至福感」($\beta =-.231$, ns)、「社会的な支え」($\beta =-.203$, ns)、「家族との関係」($\beta =.051$, ns)、「身体的な不健康感」($\beta =-.173$, ns)、「社会的つながりの不足」($\beta =.056$, ns)、「人生に対する失望感」($\beta =-.013$, ns)であった。

「とらわれ」について、負の影響を及ぼしたのが、「自信」($\beta =-.213$, $p<.05$)、「精神的なコントロール感」($\beta =-.391$, $p<.01$)であり、影響を及ぼさなかったのが、「人生に対する前向きな気持ち」($\beta =.117$, ns)、「達成感」($\beta =-.095$, ns)、「至福感」($\beta =.020$, ns)、「近親者の支え」($\beta =-.009$, ns)、「社

会的な支え」($\beta =-.124$, ns)、「家族との関係」($\beta =-.128$, ns)、「身体的な不健康感」($\beta =-.176$, ns)、「社会的つながりの不足」($\beta =-.200$, ns)、「人生に対する失望感」($\beta =-.240$, ns)であった。

表6 主観的健康感と甘えの重回帰分析結果

	直接的甘え	屈折的甘え	とらわれ
人生に対する前向きな気持ち	.058	-.019	-.117
達成感	-.273*	.112	-.095
自信	-.303**	.225*	-.213*
至福感	.218	-.231	-.020
近親者の支え	.357**	-.336**	-.009
社会的な支え	.347**	-.203	-.124
家族との関係	-.117	.051	-.128
精神的なコントロール感	.104	-.406**	-.391**
身体的な不健康感	.010	-.173	-.176
社会的つながりの不足	-.279**	.056	-.200
人生に対する失望感	.038	-.013	-.240
* $p < .05$, ** $p < .01$			

考 察

本研究では、青年期における甘えと主観的健康感との関連を調べることを目的に調査を行った。

(1) 直接的甘えと主観的健康感との関連についての検討

「近親者の支え」が「直接的甘え」に対し、正の影響 ($\beta =.357$, $p<.01$) を及ぼしており、また「社会的な支え」も「直接的甘え」に対し、正の影響 ($\beta =.347$, $p<.01$) を及ぼしていた。これにより、「近親者の支え」が「直接的甘え」に影響を与えるという仮説は支持された。

土居 (1971) が、本来甘えの育つべき場所であるのは母親や親しい家族がいて安心な「家庭」であると述べていることから、健康的な甘えを引き出すことができるのは家庭環境なのではないかと予想したが、調査の結果、素直な甘えに必要なのは家庭環境だけでなく、社会的な環境も影響しているということがわかる。

また、「達成感」と「自信」においては、男女共に有意な負の相関がある。直接的甘えの高い人は、達成感や自信が得られにくいということがわかる。

(2) 屈折的甘えと主観的健康感との関連についての検討

「自信」が「屈折的甘え」に対し、正の影響 ($\beta =.225$,

青年期における「甘え」と主観的健康感との関連

p<.05) を及ぼしていた。

「近親者の支え」、「家族との関係」、「社会的な支え」において低い得点を得やすいと、自分の欲求が満たされないと考えやすいため、自分が置かれている環境に満足できず、「屈折的甘え」および自己愛的甘えが高くなるという仮説を立てたが、「屈折的甘え」に負の影響を与えていたのは、「近親者の支え」($\beta = .336, p < .01$)、「精神的なコントロール感」($\beta = .406, p < .01$)であり、仮説は完全には支持されなかった。

「自信」が「屈折的甘え」を含む自己愛的甘えに正の影響を与えた理由としては、稲垣(2006)の述べている、自己をあからさまに主張するのではないが、他者から注目され賞賛されるべきであるという意識を持つ傾向が強いということに関連があるのではないかと考えられる。また、特権意識や誇大性が「自信」を引き出す要素になっているのではないかと考えられる。

(3) とらわれと主観的健康感との関連についての検討

「とらわれ」に対しては、主観的健康感の11下位尺度のいずれの要因も有意な正の影響を及ぼさなかった。一方、「自信」と「精神的なコントロール感」が「とらわれ」に対して有意な負の影響を与えている($\beta = -.213, p < .05, \beta = -.391, p < .01$)。「自信」を持ってないと、「自分」というアイデンティティを見失ってしまい、何かにとらわれているという感覚に襲われやすいのではないかと考えることができる。これは、「精神的なコントロール感」についても言えることで、持続的に自我を保つことができずにいるのではないかと考えられる。

また、相関分析においては、「精神的なコントロール感」、「身体的な不健康感」と「とらわれ」の間に、男女共に有意な負の相関を確認することができる。「身体的な不健康感」については、自分が何かの病気にかかっているのではないかと、といった思い込みの心情から「とらわれ」の傾向が高まっているのではないかと考えられる。

「とらわれ」とは、不安の原因となっていることにとらわれていることが問題であると気が付いていない状態のことをいうため、本来の自分をわかっていない可能性もある。その点を考慮すると、「と

らわれ」を調査するのに主観的健康感尺度を使用するのはふさわしくなかったのではないかと考えられる。

今後の課題

本研究では、主観的健康感が青年期における「甘え」にどのような影響を与えているのかを調査することを目的として検討を行った。「直接的甘え」、「屈折的甘え」に関しては、主観的健康感との正の関連がみられたが、「とらわれ」に関しては仮説に沿う結果を見出すことができなかった。「とらわれ」に関しては、主観的な観点からみるのではなく、無意識的な要素も関わってくると考えられるため、今後調査を行う際、尺度を改める必要があるのではないかと考える。

また、「直接的甘え」と「屈折的甘え」に関しては、それぞれに対し関連がみられた要因である「近親者の支え」、「社会的な支え」そして「自信」等のさらに細やかな関連をみるための調査を行うことで新たな発見ができるのではないかと考えられる。

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました京都学園大学人間文化学部心理学科伊原千晶教授、大阪大学大学院医学系研究科特任研究員柗木隆寿教授、京都学園大学大学院臨床心理学科畑中知佳さん、ならびに調査にご協力いただいた京都学園大学の先生方、学生の皆様深く感謝いたします。

引用文献

- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
 土居健郎 1994 日常語の精神医学 医学書院
 土居健郎 1997 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版
 長谷川浩一 1994 心の健康を考える—臨床心理学トゥデイ— ミネルヴァ書房 p.63-66
 稲垣実果 2006 自己愛的甘えと迎合の心理、基本的信頼感 神戸大学発達・臨床心理学研究、5、1-10.
 稲垣実果 2007a 自己愛的甘え尺度の作成に関する

- る研究 パーソナリティ研究 16 (1)、13 - 24
- 稲垣実果 2007b 自己愛的甘えと自己愛的対人態度・一体感願望について 神戸大学発達・臨床心理学研究、6、1-9
- 稲垣実果 2013 思春期・青年期における自己愛的甘えの発達的变化—自我同一性との関連から— 教育心理学研究、61、56 - 66
- 神谷真由美・上地雄一郎・岡本祐子 2012 大学生の自己愛的甘えと誇大型・過敏型自己愛傾向との関連 広島大学心理学研究 第12号 127 - 136
- 北村陽英 1987 「甘え」の意義と病理性：甘えることを知らなかった子の事例より 児童心理 41 (7)、38-44.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人のあり方との関連 日本教育心理学研究、第46巻 (3)、280 - 290
- 大野裕・吉村公雄 2010 WHO SUBI 手引 金子書房
- 大野雄子 2008 青年期の自己愛と対象関係について—臨床事例の観点から— 千葉敬愛短期大学紀要 30、61 - 71
- 相馬一郎・春木豊・野呂影勇 1990 健康感尺度の作成 平成元年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 谷冬彦 2000 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要 63A、1-8
- 谷冬彦 2006 自己愛人格と自己愛的甘えに関する研究 日本心理学会第70回大会発表論文集、22.
- 東條光彦・保坂亨 1995 主観的健康感尺度による中学生不登校者の自己認知に関する検討 千葉大学教育実践研究 2、67-74
- 藤南佳代・園田明人・大野裕 1995 主観的健康感尺度 (SUBI) 日本語版の作成と、信頼性、妥当性の検討 健康心理研究 8 (2)、12-19
- 津田茂子・田中芳幸・津田彰 2004 妊娠後期における妊婦の心理的健康感と出産後のマニティブルーズとの関連性 行動医学研究 10 (2)、81-92
- 内田亜紀子 1998 大学生の「気がね」に関する研究 群馬大学教育実践研究、15、271-284

大学生の対人関係について

質問紙調査

本日は調査にご協力いただきありがとうございます。この質問紙は、フェイスシート（表紙）1枚＋質問用紙2枚＋WHO SUBIの計4枚で構成されています。学部、学年、年齢、性別を記入後、各項目について自分に当てはまるものに○をつけてください。（WHO SUBIの採点の欄がありますが、そちらは記入しなくてかまいません。）乱丁・落丁等がありましたら申し出てください。回答の内容は研究以外の目的に使用することは決してありません。質問項目は全部で71問あります（質問用紙31問＋WHO SUBI 40問）。それぞれの質問をよく読み、すべての質問に答えてください。回答もれのないようにお願いします。回答後はこの質問紙を決して持ち帰らず、前へ提出してください。

学部 _____ 学科 _____

学年 _____ 年 _____ 年齢 _____ 歳 性別 男・女 _____

それぞれの質問について、自分に当てはまると思う程度を1から5の数字から選び、1つに○をつけてください。質問は1から31まであります。

非常によく当てはまる
 やや当てはまる
 どちらともいえない
 やや当てはまらない
 全く当てはまらない

選択肢

1. 全く当てはまらない 2. やや当てはまらない 3. どちらともいえない
 4. やや当てはまる 5. 非常によく当てはまる

1. 自分が気がねしているということに、気づいて欲しいと思うことがある。 1・2・3・4・5
2. 私は、何かをするとき人をあてにしたいと思う。 1・2・3・4・5
3. 周りの人の気くばりが足りないので、不満に感じることもある。 1・2・3・4・5
4. 私は、悲しいことがあったときに人に慰められたいと思う。 1・2・3・4・5
5. 私は、何でもないことにわだかまりを持つ。 1・2・3・4・5
6. 周りの人に対して、自分から言わなくても、
 もっと気持ちを察して欲しいと思うことがある。 1・2・3・4・5
7. 私は、何事も人にまかせたいと思う。 1・2・3・4・5
8. 私には、「自分がない」と思う。 1・2・3・4・5
9. 私は、悩みがあると人に相談したいと思う。 1・2・3・4・5
10. 周りの人に対して、もっと私に気をつけてほしいと思うことがある。 1・2・3・4・5
11. 私は、ちょっとしたことでもひがむ。 1・2・3・4・5
12. 自分の不注意でどんなに迷惑をかけても、
 周りの人は結局許してくれると思うことがある。 1・2・3・4・5
13. 私は、困ったことがあるとき人にすがりたいと思う。 1・2・3・4・5
14. 不適切なことをしたとしても、大目に見てもらえると思う。 1・2・3・4・5
15. 私は、何事につけ人をたのみにしたいと思う。 1・2・3・4・5
16. 相手に対して失礼なことをしても、そのうちに許してくれると思う。 1・2・3・4・5
17. 私は、ささいなことで人をうらむ。 1・2・3・4・5
18. 私は、人に甘えたいと思う。 1・2・3・4・5
19. 私は、いろいろなことに気おくれする。 1・2・3・4・5

青年期における「甘え」と主観的健康感との関連

非常によく当てはまる
 やや当てはまる
 どちらともいえない
 やや当てはまらない
 全く当てはまらない

20. わがままなことを言っても、そんなに嫌われることはないと思うことがある。 1・2・3・4・5
21. 私は、ささいなことでも気を揉む。 1・2・3・4・5
22. 私は、困ったことがあると人に何とかして欲しいと思う。 1・2・3・4・5
23. 周りの人に対して、何も言わなくても、
 自分のしてほしいと願っていることを汲みとってほしいと思うことがある。 1・2・3・4・5
24. 私は、ちょっとしたことでこだわる。 1・2・3・4・5
25. 責任を果たさなくても、周りの人はきっと許してくれると思うことがある。 1・2・3・4・5
26. 私は、自分が思ったとおりにならないとすねる。 1・2・3・4・5
27. 私は、人に自分のことを言わなくてもわかって欲しいと思う。 1・2・3・4・5
28. 私は、何でもないことにとらわれる。 1・2・3・4・5
29. 私は、何事につけ人に後押しをして欲しいと思う。 1・2・3・4・5
30. 私は、ちょっとしたことでふてくされる。 1・2・3・4・5
31. 私は、物事がうまくいかないとやけくそになる。 1・2・3・4・5

引き続き WHO SUBI の回答をお願いします。